

- 2015年・記録会は8月16日(日)HLG(ちびた)とPLGはグリーンパークの予定です。
- 2015年・記録会は9月20日(日)HLGは吉見、PLGはグリーンパークの予定です。

今年も南側に作ったゴーヤの日覆いが夏に間に合って緑が美しい。毎年同じゴーヤの苗を買っているのだが、葉っぱとゴーヤの実の形が毎年違うのが気に入らない。今年のが一番葉っぱが小さく色も薄く、実も華奢で小さい。しかもこの実は早めに取らないと堅くなるようだ。

今年の夏出だし暑かったが、7月になって少し中垂れで涼しかったので期待していたのだが、その後がてんで暑くなった。しかも8月に入って酷暑が続くので、年のせいで今年夏のヒコーキはお休みにしました。たまに早起きて公園に行っても、HLGを5回も投げるとどっと汗が出てダメだ。しかし、あと1月我慢すれば秋になるので頑張らねば。

- | | |
|-------|--|
| 記録会報告 | ①②③④2015年6月、7月記録会HLG/PLG、 |
| | ⑤2015年モンゴルFF世界選手権大会報告・金川 |
| お知らせ | ⑥まつたけ大会案内 ⑦新潟朱鷺カップ案内 |
| | ⑧FF日本選手権大会案内 ⑨2015年FF模型小型機旭大会案内 |
| FFサロン | ⑩フリーフライトは何処へ行く 吉岡靖夫 |
| 雑談天国 | ⑪ 尖閣諸島の防衛 平尾 |
| ざつがき | ⑫ |

◆2015年6月記録会報告(HLG/PLG)

6月HLG記録会報告

①.....平尾

6月記録会は1週間遅れて吉見公園で開催予定でした。ところが現地に行ってみると、もの凄い草で、みんなが集まっているはずの自動車が草に潜ってまるで見えません。やむを得ず周囲をゆっくり回って探すと南側のヘリコプター基地のあるあたり中道に集まっていました。しかし、その道も凄い草に覆われていて、怖い程ですがみんなの車をよけながら、そろりそろりと侵入しました。この日は北風風なので北の鉄塔側が発航地点としてはいいのですが、計時するにしても草が凄くて見えそうにありませんその内にやや風も強くなってきたし、これでHLGの距離が出ると落下地点の確認が出来そうもありません。みんなの意見を聞いた所、やる気満々の野中選手以外は機体のロストを嫌ってやる気なさそう。そこで選手と話し合った結果、本日の記録会は秋まで延期とし、9月に2試合分をまとめて記録会をやる事で決着しました。それにしても、これほど凄い草まみれの公園は経験がないので、どうなったのか。どうやら、市の予算の関係で吉見公園草刈り回数を1回減らした結果のようです。この様子では来年の6月も使えるかどうか解りません。草が々なのか心配なのは9月の記録会ですが、1年後の事は考えない事にして頑張りましょう。と言う事で今回は記録なしの報告です。

6月PLG記録会報告

②.....工藤

雨で一周遅れのランチャーズ記録会を武蔵野中央公園で行いました。天気予報は1メートルから3メートルの風で、好条件での記録会を期待して会場に到着。予報どおり無風に近く、練習ではすべてMAXではないかという状況で、いきなりフライオフをやるかとの話が出るほどでした。しかし、いざ本番が始まり1投目を行うと、八木(喜)選手と岡田選手を除いて20秒台から30秒台と記録が伸びません。好条件の中でMAXが出ない理由を模索していると、2~3投目からMAXが出るような気流になりました。出場選手全員が気流に悩んでいる中、八木(喜)選手と八木(博)選手は6投目・7投目で5MAXを記録しフライオフ進出。気流に悩まされる中を三辺選手と工藤は4MAXでフライオフ進出ならず、岡

田選手は3MAX目で機体をロスし、結果は3MAXで撃沈。久々に出場の倉田選手は途中出場ということで6投3MAXで終了。河田選手、大岩選手は2MAX、木下選手、無尾翼機の勝山選手は1MAXで終了。全体的に好条件の割にはフライオフ進出2名と難しい気流の記録会でした。フライオフはご夫婦での勝負となりましたが、八木(博)選手 41 秒、八木(喜)選手 45 秒で奥様が4月以来2か月ぶりの優勝で、今年2勝目です。今回は久しぶりに10名の方の参加を得て、楽しい記録会でした。

6月PLG記録 6月28日 グリーンパーク 晴 風1~3m 40秒マックス5/10投、

| NO | 選手名 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 計 | F1 | F2 | 合計 |
|----|-------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-------|----|-----|
| 1 | 八木喜久江 | 40 | 40 | 31 | 40 | 40 | 40 | | | | | 200 | 45/ | | 245 |
| 2 | 八木 博典 | 30 | 28 | 40 | 40 | 40 | 40 | 40 | | | | 200 | 28/41 | | 241 |
| 3 | 三辺 雄司 | 24 | 27 | 40 | 40 | 26 | 40 | 26 | 07 | 36 | 40 | 196 | | | 196 |
| 3 | 工藤 陽久 | 34 | 29 | 40 | 29 | 24 | 35 | 36 | 40 | 40 | 40 | 196 | | | 196 |
| 5 | 岡田 光正 | 40 | 39 | 31 | 40 | 35 | 40 | 34 | 05 | 33 | 03 | 194 | | | 194 |
| 6 | 木下 龍三 | 38 | 40 | 17 | 29 | 33 | 23 | 09 | 34 | 39 | 12 | 184 | | | 184 |
| 7 | 河田 健 | 33 | 40 | 22 | 31 | 25 | 36 | 29 | 40 | 29 | | 180 | | | 180 |
| 8 | 倉田 泰蔵 | 21 | 40 | 23 | 40 | 22 | 40 | | | | | 165 | | | 165 |
| 9 | 勝山 彊 | 25 | 20 | 24 | 24 | 23 | 40 | 31 | 32 | 27 | 29 | 159 | | | 159 |
| 10 | 大岩 一郎 | 20 | 11 | 40 | 40 | 17 | 26 | 17 | 17 | 18 | 13 | 144 | | | 144 |

◆2015年7月記録会報告(HLG-B/PLG)

7月HLG記録会の報告

③.....平尾

1年ぶりのグリーンパーク、道中の五日市街道はまだ早いので人もパラパラ、景色全てが懐かしい。

公園に到着したが8時前なの選手は少ないが、暑い中チャンと練習している。何時も車を留める場所付近は、工事が進んでいないので駐車は大丈夫そう。この日も酷暑予想なのでスポーツグラウンドも人が少なく、この分ではヒコーキは飛ばしやすそうである。朝飯後、暑い中やむなくチョットだけ練習をする。小型の振り投げは手が引っかかって、機体がやはり巧く上がらない。この調子だと記録会はそこそここなして、死なないように日陰で過ごす事に決めた。

さて、ここでの記録会は、何時ものように参加者が多く立派なもの。今回は珍しく初参加者は居なそう、豪腕が揃って熾烈な戦いになった。HLG-Bは小型なので飛ばし方に難があって、大型ほど腕力だけでは巧くいかない。そこを狙って、グリーンパークに根をはっている古参井村選手が久し振りの本気で来た。肩に自信のある選手は稲葉、安倍、赤星、森口、菅野、相沢選手等々、多士済々だが、そう甘くないところがHLG-Bの面白さである。

結局は井村選手と曲者梅津選手のフライオフとなり微妙な差で井村選手が優勝、2位に梅津選手がつけた。ここは狭いので気流読みが難しく赤星選手が1秒足らず3位、公園のスペシャリスト稲葉選手198秒で4位、体力抜群の阿部選手が189秒の5位、航空工学の中禮選手と太り気味の森口選手が6位と並んで、ここまではひとまず順調か。久し振りに参加の池田戦車？はそこそこの8位、練習では抜群だった相沢選手が9位、地元星野選手と今関選手が原選手を挟んで10位、12位、1年振りの田中選手はちびたで13位、14位の菅野選手は来月の図書券狙って軽く練習と言ったところか。飛び跳ねる吉岡選手は、ここでは歩がわるそうだが、いやいや、以外と力を来月に温存か。

7月HLG記録 7月26日 グリーンパーク、晴、31度、乱風1~3m、40秒マックス5/10投

| NO | 選手名 | R1 | R2 | R3 | R4 | R5 | R6 | R7 | R8 | R9 | R10 | 合計 | F 1 | F 2 | 総計 |
|----|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-------|-----|-----|
| 1 | 井村真三 | 28 | 28 | 40 | 35 | 40 | 40 | 38 | 40 | 40 | | 200 | 57/49 | | 257 |
| 2 | 梅津和則 | 40 | 31 | 40 | 40 | 38 | 33 | 40 | 40 | | | 200 | 44/51 | | 251 |
| 3 | 赤星和芳 | 22 | 40 | 40 | 08 | 39 | 40 | 40 | 17 | 21 | 19 | 199 | | | 199 |
| 4 | 稲葉 元 | 40 | 40 | 38 | 40 | 28 | 35 | 40 | 30 | 23 | 29 | 198 | | | 198 |
| 5 | 安部雅幸 | 40 | 32 | 21 | 39 | 40 | 30 | 38 | 28 | 23 | 25 | 189 | | | 189 |
| 6 | 中禮一彦 | 31 | 40 | 08 | 20 | 32 | 40 | 34 | 25 | 40 | 30 | 186 | | | 186 |

| | | | | | | | | | | | | | | |
|----|-------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|--|-----|
| 6 | 森口健太郎 | 39 | 26 | 30 | 36 | 32 | 40 | 21 | 35 | 28 | 37 | 186 | | 186 |
| 8 | 池田昇 | 27 | 40 | 40 | 07 | 31 | 40 | 26 | 21 | 23 | 20 | 178 | | 178 |
| 9 | 相沢泰男 | 15 | 32 | 26 | 36 | 22 | 34 | 29 | 33 | 32 | 40 | 175 | | 175 |
| 10 | 星野聡 | 29 | 07 | 28 | 27 | 40 | 40 | 04 | 31 | 25 | 01 | 168 | | 168 |
| 11 | 原一博 | 36 | 27 | 40 | 19 | 19 | 28 | 32 | 31 | 04 | 20 | 167 | | 167 |
| 12 | 今関健一 | 08 | 28 | 19 | 28 | 17 | 40 | 25 | 26 | 14 | 27 | 149 | | 149 |
| 13 | 田中晋 | 21 | 24 | 21 | 40 | 21 | 21 | 36 | 21 | 18 | 17 | 142 | | 142 |
| 14 | 菅野俊行 | 22 | 17 | 09 | 24 | 20 | 23 | 29 | 30 | 22 | 13 | 128 | | 128 |
| 15 | 吉岡潤一郎 | 27 | 14 | 33 | 17 | 17 | 22 | 16 | 12 | 20 | 24 | 126 | | 126 |
| 16 | 平尾寿康 | 04 | 15 | 27 | 21 | 10 | 11 | 28 | 11 | 10 | 12 | 103 | | 103 |

7月PLG記録会の報告

④……工藤

猛暑の武蔵野中央公園でランチャーズ7月記録会を行いました。久しぶりにHLGと合流しての記録会です。天気予報は北のち南東風の1メートルの風、気温は30度から34度と猛暑ですが好条件での記録会となりそうです。各選手とも8時前には到着し練習をしていましたが、時々大きなサーマルが出没して、練習中に機体ロストとにならないように注意しながらの練習で、時折、「今飛ばしたらダメだ。」との声が聞こえます。9時から記録会開始ですが予想どおり好記録続出で、30秒台後半からMAXで、八木(博)選手は5投5MAXで早くもフライオフ進出決定。続いて岡田選手も6投5MAX、八木(喜)選手・初出場の尾羽林選手は7投5MAX。その後も河田選手・三辺選手・工藤・大江選手も5MAXを記録し、なんと10名出場で8名のフライオフという近年まれにみる好記録の記録会でした。

しかし、10名中8名のフライオフではフライオフ進出の条件を再考すべきとの声もありました。各選手の技術向上のため、1グラムの公園記録会は45秒MAXか10投7集計などとしなければならないかもしれません。フライオフは猛暑の中ですので、1投・時間無制限として決定しました。河田選手は5MAX獲得までは打ち上げに苦戦していたようですが、フライオフは見事な打ち上げと返りで、高高度を獲得して見事にサーマルを捕らえました。その後八木(喜)選手・岡田選手・八木(博)選手もサーマルを捕らえ、それぞれ大フライト。結果は河田選手144秒、八木(喜)選手84秒、岡田選手64秒、八木(博)選手53秒で、河田選手が26年7月の優勝以来1年ぶりで優勝でした。以上工藤陽久

7月CLG記録 7月26日 グリーンパーク 晴 風1~3m 40秒マックス5/10投、

| NO | 選手名 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 計 | F1 | F2 | 合計 |
|----|-------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|----|-----|
| 1 | 河田 健 | 34 | 40 | 34 | 40 | 40 | 40 | 34 | 40 | | | 200 | 144 | | 344 |
| 2 | 八木喜久江 | 40 | 37 | 40 | 40 | 09 | 40 | 40 | | | | 200 | 84 | | 284 |
| 3 | 岡田 光正 | 40 | 40 | 40 | 26 | 40 | 40 | | | | | 200 | 65 | | 265 |
| 4 | 八木 博典 | 40 | 40 | 40 | 40 | 40 | | | | | | 200 | 53 | | 253 |
| 5 | 尾羽林邦夫 | 36 | 31 | 40 | 40 | 40 | 40 | 40 | | | | 200 | 48 | | 248 |
| 6 | 三辺 勇司 | 40 | 40 | 40 | 18 | 36 | 33 | 40 | 40 | | | 200 | 38 | | 238 |
| 7 | 工藤 陽久 | 33 | 32 | 32 | 40 | 31 | 40 | 40 | 40 | 40 | | 200 | 24 | | 224 |
| 8 | 大江 賢 | 40 | 15 | 40 | 29 | 37 | 38 | 40 | 40 | 36 | 40 | 200 | 06 | | 206 |
| 9 | 木下 龍三 | 30 | 26 | 40 | 36 | 40 | 29 | 21 | 13 | 27 | 04 | 175 | | | 175 |
| 10 | 大岩 一郎 | 23 | 40 | 15 | 24 | 07 | 19 | 16 | 04 | 23 | 32 | 142 | | | 142 |

◆2015年FF世界戦主権競技大会とモンゴル大会の報告 ⑤……金川茂、平尾

モンゴルで東洋で初めてのFF世界選手権競技大会が開催されました。これはひとえに我々の仲間だったガンゾリック・チミド氏の努力の賜物です。彼はイギリス、アメリカの一流大学を卒業し東京工業大学に勤めてました。しかし、モンゴル政府から帰れと言われて帰国、今ではモンゴル国立大学学長との事です。その彼の数年の努力が実り実現したのが、モンゴルでFF世界選手権競技大会を開催する事でした。そして政府まで巻きこんで国を挙げてのイベントに仕立てました。彼は主催者側な

ので今回の代表選手に入っていませんが、プレ大会では飛ばしています。

1. モンゴル、メモリアルカップ(7月21～23日)

参加者45名、うち何とモンゴル選手が24名もいて、その中から3位入賞の選手を出しているのは驚きです。さて、肩慣らしに参加した和田選手は5Rを落として21位、生駒選手は29位でした。

2. モンゴル・カップ(7月24～26日)

F1A 参加者71名、うちモンゴル選手26名、ガゾリック選手は頑張って9位でした。日本の2選手はともにFOに残ったものの利なく、和田選手が18位、生駒選手が19位でした。

F1B 参加者53名、うちモンゴル選手6名、吉田選手はFOに残ったものの22位、小鹿野選手は47位、小池選手はまだ現地に到着してなくて不参加でした。

F1C 参加者31名、内モンゴル選手6名、江連選手はFO2回戦まで頑張って4位は立派、関沢選手は振るわず2回落として21位でした。

3. FF世界選手権競技会(7月28～31日)

F1A 参加選手76名、日本からは和田、生駒の2選手が参加しました。そして参加経験豊富な和田選手が海拔1600mのモンゴルでFOに進出しFO1ラウンドは無事通過、FO第2R目は233秒で21位は残念でした。しかし、体力のいる部門でここまでやるの立派。生駒選手は第2ラウンドのみを落とし1237秒で53位でした。

F1B 参加選手77名、日本からは小我野、小池、吉田の3選手が参加。初参加だが最古参の小我野選手は7RパーフェクトでFOに進出した。しかし、FO1ラウンドが222秒で22位ですが、ここまでくるのは立派です。小池、吉田選手は2人とも第1Rを落とし他はパーフェクトで頑張ったが、小池選手が40位、吉田選手が58位でした。

F1C 参加選手は45名、日本からは江連、関沢、山崎の3選手が参加。いずれもベテランだが山崎選手は1R0秒、江連、関沢の2選手は4Rまでパーフェクト。しかし、関沢選手は5Rトラブルか、83秒と落とし、更に22秒、158秒と彼らしくない成績で終わり43位、山崎選手が44位。19人が残ったFFOに江連選手は進出。しかし利あらずFO1ラウンドが208秒で14位。(以上平尾)

金川さんのレポートから

開会式 主催者側が一番気にしていた、開会式の日天気予報が雷雨から大きくずれて、本当に素晴らしい天気となりました。盛大なセレモニーはモンゴルが得意とするところで、そのための準備もしっかりとしてきたため、雨が降ったら大人数を収容する屋内施設もないため、どうしようかと気をもんでいたはず。実に盛大な開会式で、これほどまでに大がかりな世界選手権の開会式は今までなかったはず。式典の最後で、チングスハーン像をバックに、役員を含めた全選手の記念写真撮影を行うという、心は競技が終わったような気分です。でも世界選手権はこれから始まります。28日は練習日、そして29日から競技が始まります。選手団は忙しく、さらにインターネット環境が良くないためにこちらからの報告がなかなかうまくできません。そのために陪審員として参加している私から報告させていただきました。

競技会

F1A 和田選手が30日の10分MAXフライオフへ進みます。19時から行われた5分MAXでは実に31人中27人がMAXとなり、20時30分からの7分MAXの予定が快晴で東風のために、太陽の光で計時が困難と判断され、翌朝(30日)の6:30から10分MAXの勝負となりました。1ラウンドから7ラウンドの間で、いろいろ困難な面に直面しながら、MAXを達成してきた和田選手ですので、ぜひ頑張ってください。

F1B 小我野選手は初出場ながらフライオフでも頑張りました。7分のフライオフでただ一人MAXを出したのがモンゴル選手で、ともに世界チャンピオン経験者のステファンチャック、クラコフスキー、を抑えての優勝は素晴らしいです。気流も味方したようです。優勝したモンゴル人選手は、国内大会でも最近の大会はすべて1位で、代表にも1位で選抜された選手だそうです。開催国のモンゴルとしても素晴らしい結果を残せたと思います。

F1C 早朝の1ラウンドが雨のため1時間遅れて開始されましたが、その後は天気も急速に回復し、

通常、午後は風が強いのですが、比較的弱い絶好のコンディションでした。江連選手がフライオフに残り18:30からの5分MAXでしたが、最初に発航したグループは気流が悪く落としました。江連さんもその一人です。結局7名がクリアーして19:30からの7分MAXを待っていたころ、遠方にあった黒い雲が近づいて、冷たい風が吹き始めたと思ったら急に強風が吹き荒れ、フィールドにいた数百人は一斉に本部付近まで走って非難することになりました。30メートル以上の強風が吹き荒れ、本部テントには重要な電子機器がたくさん置かれていますので、学生ボランティアや役員、選手が必死になってテントが吹き飛ばされるのを抑えました。さすが大自然の中に生まれたモンゴルの若者は何をすべきかをちゃんと知っており、その行動は立派でした。20分くらい吹き荒れた風も収まり被害は最小限に食い止められましたが、2キロ近く離れたMASAキャンプではテントのレストランなどは吹き飛ばされたようです。強風にあおられた本部テントの写真では、めくれ上がったテントを必死に抑えて何とか持ちこたえました。明日は10分MAXを7名で競います。折りたたみ機と通常のギアモデルが半々といったところです。明日はMIXMENもその後行われる予定ですが、天気予報はあまり良くありませんので競技が行われるか微妙です。午後には外国からの参加選手を楽しませるために国民的なお祭りの「ナーダム」を小規模ですが競技フィールドで行ってくれるそうです。競馬やモンゴル相撲、民族音楽などを楽しめそうですがお天気や心配です。ここまでのホスピタリティー精神で世界選手権をやってくれることはすごいことだと思います。今日ですべての世界選手権の競技が終わると思っていましたが、睡眠不足が続きます。無事に競技が終了してくれることを祈っています。

競技が終了して

世界選手権の公式競技はすべえ終わりました。天候は午後から風が強くなるというパターンでしたが、大きなイレギュラーも発生せず、結果としては良かったと言えます。主催者が非常に欲張って、世界選手権の前に2つの大会、そして後に1つの大会をセットし、本当に大変だったと思いますが、世界選手権前の大会は競技運営の予行演習としての位置づけもあったようです。アジアで最初のフリーフライトの世界選手権を、フリーフライトの歴史が浅いモンゴルが開催するというので、日本の皆さんもいろいろ協力して来ましたが、モンゴルがこれほどまでに盛大な世界選手権が開催できるとは、誰も思わなかったはずです。大会運営は大勢の大学生ボランティア無しでは考えることが出来ません。

受付、タイムキーパー、集計、通訳等、若い力を十分に発揮させた大会だと思います。聞くところによると、3食の簡単な食事は付いているとはいえ、野営のテントの3段ベッドで10日間以上も彼らは過ごし、朝晩は寒くても暖房もなしで寝袋の生活です。お湯の出ないシャワーがほんの少しと板で囲ったトイレが少しあるだけです。「お金じゃありません。世界選手権を成功させたいという気持ちから希望して来ました」と、日本語が話せる若者が言っていました。実に頼もしい若者の集団でした。急変した天気で、突風で飛ばされそうになった本部テントを必死に守ろうとする彼らの姿を見て、避難できる場所がない大草原の真ん中で、どうすべきかを、彼らはちゃんと分っているのです。

世界選手権招致の時点ではまだ国の景気も良かったようですが、最近はあまり景気が良くなく、大規模な大会を開催するにあたっての国の補助が思ったほど得られず、スポンサーを集めるのにも大変だったようです。素晴らしい演出の開会式や、外国人に「ナーダム」という祭りを見せるという、どの世界選手権でもなかったすごいことをやってくれました。明日は表彰式とバンケットです。どんな演出があるのか楽しみです。日本チームの皆さんは頑張りましたが、結果は思うようになりませんでした。

でも精いっぱいやったと思います。団長は忙しく、また、持ってきたPCから情報をアップできないということで、代わりに私の方から今回の世界選手権の現地報告をさせていただきました。

注:このレポートは金川さんがランチャーズホームページに投稿の物を抜粋し転載した物です。

お知らせ

■平成27年まつたけ大会案内(参考)

⑥

開催日時 平成27年10月4日受付7.30分、打合8.15、競技8.45～11.45分
場 所 三重県鈴鹿市池田町タンボ

| | |
|------|---|
| 種 目 | ①中型混合級(国内級ミニ国際級+電動機)※電動機:F1Qモーターラン 10 秒 E-36 モーターラン 15 秒、②小型混合級(SP76cm以下、ゴム重量10g以下) ③HLG級(A・B) |
| 競技方法 | ・中型混合級は2分max5R、・小型混合級は1分max、1Rは最大3回まで飛行可能。1分をクリアーは2分マックスの第2Rに進む。第2Rは2回まで飛行可能 2分をクリアーはFOへ進む、・HLG級は1分マックス10Rの上位5ラウンド制 |
| 参加費 | ・2000 円、中学生以下は無料、・2種目エントリーも参加費は同じ、しかし、ダブル入賞したときの副賞は上位成績の種目だけとする。 |
| その他 | ・第三者に被害を与えた場合、競技者本人の責任とする。・気象条件等により、ラウンド数、マックスタイムを変更する場合がある。・デサマライザーの火縄は必ず火縄落下防止装置を付ける(ない場合は失格とする) ・その他ご不明な点は各種目の実行委員にお尋ねください。 |

■第7回 HLG競技会【朱鷺カップ】

⑦

| | |
|-------|---|
| 日 時 | 2015年10月11日(日)AM7.30受付、7.50開会、8.0競技開始、PM1.0時終了 |
| 会 場 | 新潟市笠巻たんぼ、駐車場、トイレあり。主 催 新潟FFC |
| 参加費 | 1種目 2000 円、2種目(合計) 3000 円、子供は無料 |
| 種 目 | ①HLG-A、②HLG-B |
| 競 技 | ①8時～11時30分の間に60秒MAXで10回飛行、うち5回の合計 ②11時30分から決勝飛行 JMA国内級規定を土台にしますが、本大会独自の特別規定を付加しています。 機体数は5機まで。個別識別記号(名前など)を記入のこと。 ②競技の方法は、状況によりミーティングで発表します。 ③DTの火縄、線香等落下防止機構を装備していること *HLG-A 翼幅360mm以上、*HLG-B 翼幅160mm以上360mm未満 |
| その他 | 当日受付、参加者同伴者のご協力で運営します。 (参加人数 把握のため事前連絡いただけるとありがたい) |
| 注 意 | 競技中の事故等は競技者の自己責任でです。①ゴミ箱なし、各自で持帰り。競技スポットでは喫煙。②風向等で競技中断指の場合、直ちに飛行を停止する。 |
| 大会委員長 | 馬場 岩夫(新潟FFC) 大会競技委員長 細海 修(新潟FFC) |

■平成27年FF日本選手権競技会案内

⑧

| | |
|--------|---|
| 主 催 | 日本模型航空連盟、会場 千葉県旭市万才たんぼ |
| 期 日 | 平成 27 (2015)年 10 月 31 日(土)、11 月 1 日(日)、2 日(月) |
| 種 目 | フリーフライト F1A, F1B, F1C、規定はFAI スポーツ規定に準拠する |
| 参加資格 | 日本国籍を有する選手権期間中有効の模型飛行士登録者 |
| 選手権委員長 | 日本模型航空連盟会長安田邦男、陪審員 日本模型航空連盟金川茂 |
| 競技委員長 | FF委員会和田光信、副委員長F1A・河合 良、F1B谷塚正実、1C・西澤実、 競技役員・日本模型航空連盟会員 |
| 申込方法 | 申込書に必要事項(参加種目、氏名、住所、電話番号、模型飛行士番号、宿泊同伴者の有無)を記入し期日までに参加費を振り込む。専用の振替用紙がない場合普通の振替用紙に必要事項を記入する。納入した参加費は理由の如何を問わず返却しない。振替口座番号 0160-6-59119 加入者名日本模型航空連盟 |
| 締 切 日 | 平成 27 年(2015 年) 9 月 4 日(金)(当日消印有効) |
| 参 加 費 | 22,000 円(1種目) |

| | |
|--------------------|---|
| 宿泊について 幹旋宿舎 | 役員以外宿泊場所は自由。但し10月31日の受付・開会式・meetingに出席の事。のさか望洋荘・0479-67-3511、申込書に宿舎幹旋の要否を記載(10月31日11月1日共に7,260円、2泊の場合14,520円)。宿泊費はキャンセル可。同伴者も選手と同様宿泊を幹旋する。泊数を記入する。 |
| 食 事 参加受理 | 幹旋宿舎には宿泊日の夕食は含まれる(朝、昼食は含まない)。申込を行った会員に参加受理書を送付する。選手は所定の受付時間内に本部に参加受理書、機体仕様書を提出し受付をする。 |
| 受 付 | 10月31日16時～17時30分に宿舎本部に必要書類を提出。時間内に到着出来ない場合連絡。機体検査等を希望する選手は受付時にその旨申し出ること。 |
| 機 体 検 査 | 主催者は機体仕様書に基き仕様確認と模型飛行士登録番号の記入を確認。原則として競技前の機体検査はなし。希望の場合機体検査を行う。競技中随時抜取検査を行う場合がある。不合格の場合、それ以前の記録は全て無効。 |
| 選手の責務 | 1. 選手は他種目の役員となる。出来ない場合代理人を立て、参加申込書記入。役員業務を怠った場合、及び本要綱に理由なく違反した場合は当該選手の競技記録の一部または全部を取り消すことがある。 2. 全ての異議申立は競技委員長に文書で行う。但し、競技中に計時員や役員の決定に関する異議、競技中に発生した損失や不法行為の異議で速やかな処理が必要な異議は口頭で競技委員長に行うことが出来る。全ての異議には供託金30,000円を添える。供託金は異議が認められた場合は返却される。 3. 機体回収に4輪自動車の使用は不可。違反の場合は当該ラウンドの記録を抹消する。オートバイ使用にはヘルメットの着用等全て道交法に基づき運用する。 |
| 競 技 方 法 | 1. 競技は2014年有効のFAIスポーツ規定に準拠した公式飛行決勝飛行を行い、選手権者及び順位を決定する。天候により競技を延期又は中止がある。 2. 27年度日本選手権競技種目は11月1日F1B 11月2日F1A、F1Cを行う。 3. 競技を開始した場合は原則として当日中に競技を終了させる。 4. 表彰式は11月2日(月)の競技終了後に行う。 |
| 損 害 賠 償 世界選手権候補 | 人畜、土地、建物他の物件に競技他による損害は賠償当該選手が全額を負担。平成27年度28年度の本選手権の持点を合計し、上位より順番に次回世界選手権の日本チームの選手資格が与えられる。1位-12点 2位-9点 3位-7点 4位-6点、5位-5点、6位-4点、7位-3点、8位-2点、9位-1点 |
| 日 程 | 10月31日受付:16時～17時30分、開会式:17時30分～18時、夕食:18時 11月1日F1B、11月2日F1A、F1C及び閉会式、日の出6:04/日の入16:42 |
| 連 絡 先 | 各団体のFF委員又は事務局へ |

■平成27年FF模型航空小型機旭大会

⑨・・・FF委員会

| | |
|------|--|
| 主 催 | FF委員会、競技大会委員長 和田光信、他役員 FF委員会委嘱 |
| 期 日 | 平成27年10月31日(土)、 会 場 千葉県旭市 |
| 種 目 | ライトプレーン(JMA規定)、電動FF、HLG-A、HLG-B、F1G、F1H、F1J。 但し、各種目の参加者が3名に満たない場合は混合とする。 |
| 申込方法 | 10月31日(土)競技会場にて7:00～7:40 受付 |
| 参加費 | 2,000円(1種目)、2種目以上は3,000円)、中学生以下無料する。 |
| 規定方法 | FAIスポーツ規定に準拠し、各種目R制で5R競技を行い、合計タイムで順位を決定。同タイムの時は決勝飛行を行う。電動機規格は自由、モーターランは10秒とし、最大計測時間は2分とする。HLGは最大計測時間60秒の飛行を1ラウンドに2回行い長い飛行時間をそのRの公式飛行とする。また、状況によりRの最大計測時間他を変更することがある。 |

| | |
|-------|--|
| 競技時間 | 開会式7時40分、8時ラウンド制の競技開始。13時30分決勝飛行開始予定。ラウンドの時間等の詳細については競技会当日に発表する。 |
| 損害賠償 | 人畜土地建物他に競技他により損害賠償が必要な場合当該者が全額負担。 |
| 機体検査 | 随時検査を行う。この検査で不合格の場合には、記録は全て無効。 |
| 選手の責務 | 選手は計時員の補助員または計時員として計時に協力すること。 |
| 連絡先 | 各団体のFF委員又はFF委員会事務局 田久保ff@iinkai.ss.tt.ts.st。 |

FF文化サロン

●フリーフライトは何処に行くー絶滅危惧種にならないために ⑩ YSF 吉岡靖夫 若年層がいなくなったフリーフライト界

何時の頃から始まったのかは定かではないが、このところフリーフライト模型を楽しむ人口の減少に歯止めがかからないと感じるのは私一人だけではないと思います。

昨年2014年はYSFは創立40周年の記念すべき年でしたが、創立30年の時のようにパーティを開くことも記念誌を発行することもなく会員に記念ブルゾンを配るに留まりました。発行した会員名簿を見ると会員総数が42名ジュニア会員1名です。2001年発行の名簿では71名であった会員数が13年後には28人減少しています。故人となられた方は、把握しているのが17名おられます。退会者数が22名、新入者数が9名です。統計をとって意外だったのは新入会員が9名もあったことですが、これらの方の大半は既に他クラブに所属されていて、YSFたよりの購読を希望される所謂通信会員であります。退会された理由は様々でしょうが、高齢化と病気のためが最も多いと思われます。この趣味は戸外で思い切り飛ばし、回収をしなければなりません。高齢になると足が弱くなり、機体を追いかけるのが困難になり、飛ばすのを諦めざるを得なくなります。特にグライダー関係では全速で走り抜くことが必要で、必然的にリタイアを余儀なくされます。YSF会員の平均年齢は創立30周年の2004年から10歳近く上がっています。若年層が入会しないからです。このままでは創立50周年の2024年にはさらに悲劇的状況に入るのは避けられないでしょう。クラブの運営はボランティアによっていますが、受け継ぐ人がいるでしょうか。平均年齢はさらに上がるでしょう。ボランティアをやる意欲があったとしても身体がいうことを利かなくなる方が多くなるでしょう。

中部地方のクラブCFFCは魅力的な会誌を発行して、貴重な情報を楽しみにしていましたが、編集者がいないので廃刊になりました。そういえば京都のクラブが出していたKFC通信はとっくの昔に発行がストップしましたね。現在、定期的に発行しているのは、ランチャーズとYSFだけでしょう。前者は平尾さんという怪物が頑張って健筆を奮っています。あと20年くらいは発行されると思います。後者も勝山さんがいる限り安泰でしょう。

競技では日本選手権でもF1BはともかくAとCは競技が不成立になりかねません。厳しい見方ですがフリーフライトが消滅するのが間近に迫っています。そこで、ここからはフリーフライト国際級が今置かれている状況について話題を提供して読者のご意見を伺いたいと思います。

国際級の現状は 飛びすぎる悩み

F1ABCが今どうなっているかを私が把握している範囲で纏めました

F1A (曳航グライダー) 規定:翼面積 32 ~ 34dm²,重量 410 g以上、曳航索 50 m以内

最先端モデル 主翼翼型は曳航時は低抵抗翼(LDA翼)で滑空時には可動フラップ機構を作動させる。デジタルタイマーにより翼の動きを精密に制御。離脱時には索の長さ50mの倍の100mも上昇する。このハイテク機を曳航、発進させるには全速力で走りかつ離脱の時には腕力も必要で年配者では扱えきれない。

F1B(ゴム動力機) 規定:翼面積 17 ~ 19dm²,重量 200 g以上、ゴム重量 30 g以内

最先端モデル プロペラは遅延方式、可変ピッチ方式、主翼翼型はLDA翼でフラップ翼、自動スラスト調整など。120m以上上昇する。このクラスの機体は比較的取扱やすく、日本選手権でも参加選手

が多い。

F1C 規定:エンジンの最大排気量 2.5cm^3 ,最小重量 排気量 1cm^3 あたり 300g ,最小翼面荷重 $20\text{g}/\text{cm}^2$ エンジンラン 5秒以内

最先端モデル ギヤつきプロペラ、折りたたみペラ、折りたたみ翼の採用で到達高度は150～200mになる。飛ばすまでの準備が複雑である。完成品は3クラスの機体の中で最も高価であり、飛行に失敗すると修復が不可能になるケースが多い。

これら最先端の機体は自作は無理で、買わなければなりません。しかし高価ですので、この世界に入ったばかりのビギナーは躊躇するでしょう。これらのハイテク機が大半を占める世界選手権などの競技会で通常ラウンドでの全マックスをとる選手は30名以上になりフライオフの際の計時員を揃えるのが難しいという課題に直面します。今夏のモンゴルでの世界選手権では以下のようになっています。幸い、競技は滞りなく行われましたが、10～20年前の自作機を飛ばしていたときは飛躍的に通常ラウンドを通過する選手が増えています。この状況はハイテク化が進めば進むほど顕著になることでしょう。私見では参加選手の10%内外が通常ラウンドを通過する程度が妥当な線と思います。

| 種目 | 参加者 | 通常Rd通過者 | フライオフ通過者 | |
|-----|-----|---------|------------|----------|
| | | | 1Rd (300秒) | 2Rd |
| F1A | 76 | 31 | 21 | (420秒) 0 |
| F1B | 75 | 31 | 14 | (420秒) 1 |
| F1C | 45 | 19 | 7 | (600秒) 1 |

そこで次のことが現実問題として浮上します。

1. 機体性能が飛躍的に向上したために、フライオフの設定タイムが10分に達することも起きているが、飛行場内に確実に着地できる場所は世界広しといえど、数えるほどしかない。特に風がある場合などは、街の中に着地して問題を起こすことが予想される。
2. 10分間、飛んで小さくなった機体を見続けられる計時員が何人いるのか。3分間なら何とか機体を見失うことがなくても、優秀な双眼鏡と頑丈な三脚を使っても10分間は無理な場合が多いであろう。高齢者の計時は視力と持続力を考えると無理である。

これを解決するには、機体の仕様を落とすことが必要でしょう。日本では今、3分のフライトでさえ満足に飛ばすことが困難です。このままでは若年層の参入を望めないでしょう。上記の問題は世界中の共通課題として解決策が練られています。次に注目すべき解決案を抜粋します。

フリーフライト国際級の改革案

まずドイツがCIAMに提出した案は

1. 自作するのに複雑過ぎない。
2. 取り扱うのに複雑ではない。
3. 価格が高すぎない。
4. 新人が最初から楽しみ満足出来るように。
5. 良い選手と究極のハイエンドの選手とのギャップは維持する

をコンセプトに翼面積を可変にする可変機構の禁止を提案しました。

ポーランドはF1Aの曳航索を50mから40mに、オーストリアは35mにする案を提出しました。イギリスは向こう5年間で段階的にルールチェンジをする提案です。

第1ステージ 模型の仕様には触れない変更 2016年発効

第2ステージ 現在の機体の調整を必要とする装置や技術の使用を禁止 2018年発効

第3ステージ 静気流で4分を超えることがないような、Maxタイムを2分30秒にするための新しい機体仕様の作成 2020年発効

の3段階に分けて無理なく性能の縮小を図ろうというものです。

第1ステージ ー2016年発効ー

F1A:発航時のスピードを遅くするために曳航索の直径をたとえば 1.75 mm以上にします。離脱時に索を離すのを防ぐため、離脱時の選手と索の終端の距離が1m以内にあること。

F1B:DPRの禁止. 両腕で機体を支えての発航. これで到達高度が減少する。

F1C:モーターランを5秒から4秒へ

第2ステージ ー2018年発効ー

F1A: フラップ翼の禁止

曳航時にストレートウ、サークリングおよび離脱の3機能だけに限定する。

発航とグライドの調整のみが可能。

F1B: バリアブルピッチプロペラの禁止

フラップ翼の禁止

DTなどに使う1ファンクションタイマーのみ使用可

プロペラ直径は 500mm以下

円盤投げ発航の禁止

F1C: ギヤエンジンの禁止

フラップ翼の禁止

折りたたみ翼の禁止

バリアブルピッチプロペラの禁止

第3ステージ ー2020年1月発効ー

第1, 第2ステージの変更を行ったうえにさらに翼スパンに制限を加えています

F1A: 1.9 m以内、 F1B: 1.3 m以内、 F1C: 2.1 m以内

競技の運営

ラウンド数を5ラウンドにする。調整を行ったモデルならば マックスに届くでしょう。この改訂で フライオフに多くの時間を割くことが可能になろう。飛ばすと宣告をしてから 10 分以内に発航すること。

最終段階でMax time を 150 秒に短縮する。この措置によって多数の飛行場の大きさに適合した飛行が期待出来る。今は完成機を買って飛ばすのが主流ですが自作が可能になり「作って飛ばす」という模型の原点に戻れるでしょう。これらの変更がすべて通るとは思いませんが、現実には生じている問題の解決に役立つのではないのでしょうか。

私案 Super F1A,B,Cはいかが

私はこの提案に原則的に賛成ですが、このような変革は技術の進歩を否定すると、反対論が当然出ることでしょう。苦勞して機体の性能を進化させたのに、その苦勞を否定するのは許せないという考えが必ず出るでしょう。バント発航をした機体が垂直上昇をして50mもの高度を獲得して約100mの高度に達しそこから優雅に滑空を始める。選手にとっては応えられない瞬間です。これらの技術に挑戦してキマツタ時は、何とも言えないエクスタシーを感じるでしょう。

そこで、現行のF1ABCを規定はそのまま規定内であれば何でもありのSuper F1ABCに格上げして残り5年に1回くらい、会場の広さが桁違いに広く10分フライオフが可能な、たとえばモンゴルの草原で世界選手権をしてはと思います。なお、Max Time は4分に設定、5ラウンド、フライオフは6、8、10分と 2 分刻みに上げる。技術の進歩を止めるのは避けたいので、極限的モデルを作って、このSuper class で大いに競って欲しいのです。これによりフラストレーションの解放が出来れば良いでしょう。この提案に対して感想、提案などをお寄せ下さい。

では若年層世代をフリーフライトに引き込むには

スマートフォンなんてものは我々のこどもの時代にはなかった。遊びをするには自分で工夫してモノを作らなきゃならなかった。それが今ではありとあらゆるモノが、手に届く金額で入手できるので、自分で苦勞して作るのはダサイことである。それに模型飛行機を作るのには鋏やナイフ等の刃物が必要だ。危険な刃物を持つてはいけないと常日頃いわれている。ママや先生に見つかったら叱られる。それと、たとえライトプレーンでも飛ばす場所がないですね。飛ばすとすると学校の校庭ですか

ね。そこも勝手には飛ばせない、許可を貰わねば。借りるのも大変なのです。それと今はこどもが外で遊ばない。私は2006年から6年間地元の青少年対策上原地区委員会の会長を仰せつかり、地区のパトロールを交代で務めました。夕方歩いてもこどもが外で遊んでいるのに会うことは殆どなく無駄なことをやっていると感じました。その時間には家でTVを見るかスマートフォンでゲームに熱中していることでしょう。こういうこどもを模型飛行機に誘い出すのは大変です。

では20～40歳のお父さんを誘ったらと思いますが、これも難しい。大体この世代の連中は仕事で忙しがっている。何よりもこの世代の人々は、現在の小学生が受けている安全第一の教育を受け始めた世代です。自作をして何かを作ることが苦手でしょう。

これらの世代の人間をフリーフライトに誘え込むにはどうするか。いろいろ方法はあると思いますが、その一つとして、フリーフライトモデルが飛ぶ姿を多くの人に見て貰うことです。フリーフライト機が飛ぶのを見た人は驚くほど少ないのです。日本選手権は千葉の田んぼで開きますが、集まるのは関係者だけで、わざわざ見物に来る観客は0に近いでしょう。いわば密室の中で競技をしているのです。また、ライトプレーンはこどもの時に作ったことがあるかを聞けば大半の人が、イエスと答えるでしょうが、ではどの位の高さに上がったを聞くと、良く上がって小学校の3階校舎の屋根より高く上がったと答える人は僅かであり、大半はせいぜい2階の窓に達した程度で、全く飛ばなかったとの答えもかなりあります。この経験からライトプレーンは飛ばないモノと思い込んで人が多いのではないのでしょうか。

世の中の殆どの人が、実はフリーフライトモデルが飛ぶのを見たことがないのでは。ライトプレーンが、急上昇して豆粒大になるのを見たら、見方が変わるのではないのでしょうか。そうして、自分も作ってみようという人が少しでも出るのを期待します。出来れば日本選手権の見学に誘ってフリーフライト国際級の素晴らしい飛行を見て自分も作ろうと決心すれば大成功。我々の一人一人がビギナーになりそうな候補がいたら一本釣りをして仲間にするのに努力することが必要な気がします。現在実施している「こども模型飛行機教室」の大人版教室を開催するのも良いのではないのでしょうか。

ライトプレーンは日本では竹ひごで作るのが主流で市販のキットも殆どが竹ひごの翼と桧製の胴体です。プロペラはプラスチック製です。でも完成してから主翼を、左右対称にするのは、ベテランでも難しいですね。そうして長い時間放置しておくとおきと変形がおきて、飛ばなくなることが起こります。幸い、今ではカーボンファイバー(CF)の直径1mm,1.5mm,2mm等のロッドが少し高いですが、DIY店で入手可能です。これらのCFロッドを使えば、始めに正確に作っておけば、時間が経過しても、調整なしでも飛ぶこと請け合いです。胴体もCFパイプを使えば、ゴムを巻いてもねじれが少ないのでお奨めです。CFを使ったライトプレーンは正確に作れば、素人の最初のモデルでも垂直上昇をしますで作った当人が一番驚くでしょう。またキットに入っているゴムは粗悪なものが多くよく飛びません。飛ばないで苦労している人がいたら、手持ちの使ったゴムで良いから使わせて下さい。まともにつくられたモデルなら飛び方が一変します。

かくいう私も1969年にキットのライトプレーンを作り、代々木公園で付属のゴムで飛ばしました。でも上昇がそばで飛ばしている方々の機体の1/3程度の高さにしか上がりません。近くで飛ばしていた中村雄平さん(その時は名前を知らなかった)が見かねて声を掛けて下さり、使っていたピレリ製(懐かしい名前ですね。今は作っていないでしょう)のゴムを貸して下さったので、飛ばしたら嘘のように高度をとって飛んだのです。それですっかり模型飛行機の虜になってしまいました。以来46年間飽きもしないで模型に没頭しまくっています。もしあのとき中村さんが声を掛けて頂かなかっただら、飛ばないものと諦めていたでしょう。中村さんは模型に私をのめり込ませた恩人です。

公園などで模型を飛ばしているがよく飛ばない人がいたら、適切なアドバイスをして、時にはゴムなどを進呈することで、この道に入る人がいると思います。絶滅危惧種にならないためには各人が努力することが必要です。他にも実行可能な案があるでしょう。フリーフライトモデラーは他人ごとと考えずに自分で出来ることを実行してフリーフライトが絶滅危惧種になるのを阻止しましょう。

★ 雑談天国

★ 尖閣諸島防衛はどうするか

⑪……平尾

1. 前説

中国は何処まで本気が解らないが、パラレル諸島近海の埋立等、相当強引な方法で着々と領海を広げようとしている。当然ながらその先には尖閣諸島奪取があると考えねばならない。これまでの日本の専守防衛では侵入されてから攻めていくのではあまりにも遅すぎる。我が国の重要な防衛秘密なので発表出来まいが、日本近海のどの領域まで現在防衛のための情報収集網が完了しているのが重要である。そこで日本がこれまで手を打ってきた防衛海域の現状を探ってみた。自分の勉強不足もあって、解ってきた事は日本は相当以前からその対策に努力しているのである。日本は以前から情報網を完備しているので、それらをうまく使っているのである。

さて、その近海の情報収集網であるが、1つは日本から世界に向かって張り巡らせている海底ケーブル網の利用である。もう1つは、現在日本が世界に誇る海自による機雷掃海艦によるものである。

三番目はアメリカと共同しての対潜哨戒網の充実である。このうちで最近特に目立つのが、安倍さんが度々ホルムズ海峡の機雷掃海等について触れるのだが、それには理由があるのだ。最近では与党の方からも、そろそろ日本近海の有事について説明すべきだと話が出ているが、安倍さんはまだ早いとの判断のようである。皆さん、この程度の話ではチンプンカンプンでしょうが、その為の文であるので読んで戴けると納得されると思う。古代からの海洋国日本が、全てを失った第2次大戦以降も、営々と続けてきた努力がようやくここで生きてくるのである。これを考えると、日本はまだまだ運が付いていると言えるのではあるまいか。



(米国防総省の中国に関する軍事・安全保障年次報告書より)

2. 日本近海の哨戒

哨戒とは敵の侵入や襲撃に備えて周辺あるいは特定の区域を警戒することをいう。搜索、阻止哨戒、触接追尾、偵察等を常時監視する事で、すべての作戦の基盤をなし、有効で適切な哨戒が作戦の成否を左右する。現在では相手軍の電子兵器の全ての周波数を調べるのが最も重要な任務の1つで、敵がいつどのような時にどのような電波を出すのかで、何時攻撃してくるかが解る。例えば敵航空機や艦艇のロックオン周波数を把握出来れば、この電波が来れば攻撃が始まると判断出来るので、この電波をジャミングすれば敵の攻撃を不能に出来るのである。又、機影、艦影の撮影や各種発生音を把握すれば相当遠方から敵機又は艦艇を確定でき、その時点で対戦時の対応(攻撃)が可能となる。それに役立つものとして日本は以前から米軍と組んで尖閣周辺～東シナ海、南シナ海全域及び第1列島線西部、朝鮮海峡、日本海、宗谷海峡までを緊急地震速報網として完成したシステムがある。これら日本近海だけで数百個は敷設されている計器が、軍事情報用のセンサーとしてそのまま使

えるのである。東京から5本の太平洋ケーブルが、ハワイ、グアム、フィリピン、シンガポール、タイ、インドと全部リンクしており一カ所切断しても大丈夫なように、途中分岐もしている。長崎ナホトカ日本海ライン、長崎釜山ライン、長崎上海ライン、沖縄フィリピンライン、沖縄台湾ライン等もリンクしている。

内蔵しているセンサーは水流、水温、水圧、傾斜、磁気、「音響」(機雷センサーは水温、水圧、磁気、音響を感知する)である。地震計は艦船の動向チェックには完璧に有効である。この海域を通る全ての艦、特に中国海軍の大型艦及び海洋警察の5割以上、潜水艦は原潜含めて全て敵データ

として登録把握されている。中国の艦艇潜水艦が第1列島線を越える場合、必ずこのケーブルセンサー上を通過しなければならないのである。

中国の海上戦の第一目的は第一列島線内で、ここには台湾有事も含まれている。余談ですが、ここで台湾の国土保全に触れると、台湾は膨大な機雷を保有している。外国製の機雷を多数購入しており、対戦時には敵の上陸適地に濃密な機雷原を構成するつもりでいる。これまでも台湾は機雷戦の経験があるが、一方中露は機雷戦に熱心だが、中国には掃海／掃討艇そのものが少ない。機雷が敷設された場合、中国海軍は緊急に無人艇や徴用漁船を徴用しても簡単な掃海しかできないので、台湾への敵前上陸はほぼ不可能である。艦船による上陸が不可能となると、後は航空機による占領しかない。しかし、そのためには多量の兵員輸送機とその護衛戦闘機軍が必要であるが、現在の中国には戦闘機群はあっても輸送機が少なく兵員輸送力が不足している。その他のノウハウ欠如と合わせて考えれば、現状の中国軍では台湾回収は出来ないのも、パラセル諸島の埋立に本気なのである。更に余計な話であるが、中国空母遼寧の外洋訓練では兵員の3割が2日後には船酔いになって、まるで役に立たなかったと言われている。また空母訓練で離艦には成功しているが、その場合の条件は搭載燃料を1/3、且つ、攻撃兵器を搭載していない状態であったと言われる。さらに最新の情報では2機が離艦に失敗して2人が死亡したとされる。この有様では中国軍は、艦艇が第1列島線を越えたとしても、航空機攻撃が出来ないので張り子の虎と言う事になる。

さて、話を戻して多くの米潜群は、中国の潜水艦基地の出入り口付近に配備されている。なぜなら、有事発生前に中国潜水艦の配備に対応した事前展開ができるという利点だけでなく、紛争発生後には中国潜水艦の行動を制限することも可能となるからである。さらに、台湾の港付近に米海軍を展開させることで、紛争誘発の危険性を回避するという思惑もあるでしょう。日本にとって朝鮮有事や台湾有事は人ごとではない。避難する邦人を乗せた外国船を守るなら、まず機雷掃海が当然必要であり、シーレーンの安全確保も通商国家の日本にとって死活的に重要なのである。



ひゅうが

① 哨戒艦

さて日本はどうしているか。海上自衛隊の中核的な戦力である第3護衛艦隊のひゅうが、あたご、みょうこう等のヘリコプター搭載護衛艦は3機以上の対潜ヘリを搭載できる世界でも稀に見る大型の対潜専用の戦闘艦である。低中周波ソナー・曳航式パッシブソナー・可変深度ソナーを持ち、全体的な探知能力が高く、新海水域での作戦に適しているため、太平洋に面した北部・東部の水域に配備されている。海上自衛隊

のすべての中大型作戦艦艇には艦載ソナーが搭載されており、これに艦載対潜ヘリが加わる。米海軍と実施した環太平洋軍事演習において、日本の対潜技術は世界で最も優秀と公認されている。海上自衛隊が保有する対潜作戦プラットフォーム、対潜武器、対潜探知設備はいずれも世界一流である。「中国網日本語版(チャイナネット)」2013. 1

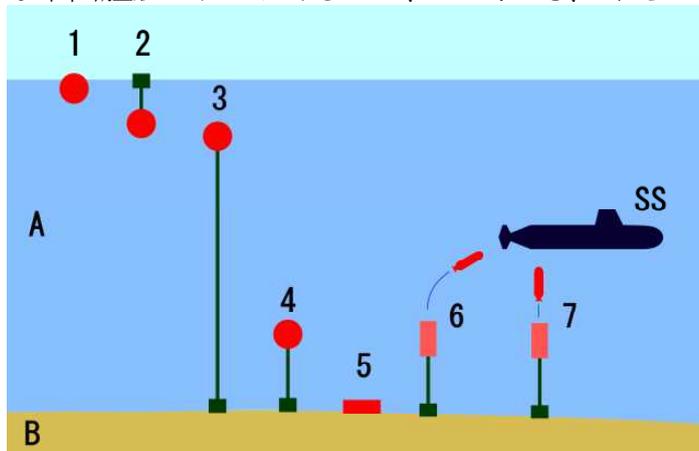
② 対潜哨戒機

1997年以前は省略してP-3Cの運用から述べる。1981年(昭和56年)に米国の有償援助により3機引き渡された。1982年に川崎重工業でノックダウン生産された機体が納入され、以後ライセンス生産に移り、1992年(平成9年)通算101機が海上自衛隊へ配備された。本家のアメリカ海軍で約200機を世界に展開していることに対し、日本周辺海域だけに100機を運用している。日本は第二次世界大戦時に連合国の潜水艦や機雷に海上輸送路を破壊され、戦略的に追い詰められた経験が哨戒機を重視する姿勢につながっているのである。導入時に受信専用のソノブイによる広域哨戒で、次々と潜水艦の探知に成功し、演習相手の海上自衛隊潜水艦部隊に「P-3Cショック」と呼ばれる脅威を与えた。しかしその後は海自潜水艦の静粛性が格段に向上し対応が困難になってきたので、現在では更に赤外線暗視装置と逆合成開口レーダーを使用してシュノーケル航走の潜水艦探知で成果をあげている。2014年時点の海上自衛隊のP-3C保有数は73機で、この数は世界第2位である。ロシ

アや中国は無論の事イギリスでも保有数ははるかに少ない。日本は後継機としてP-1を開発し今年から導入が開始された。

2. 尖閣諸島の防衛は機雷封鎖

中国は尖閣諸島が欲しいのではなくその周辺海域の資源が欲しいのである。もし、中国が攻めてきた場合に日本はどうするべきか。緊急に対処すべきは尖閣諸島が占領されないようにする必要がある。現在既に制空権は日本にあるので、早急にやるべきは海上封鎖である。しかし、どの海域までやるべきかであるが、まずは尖閣周辺～東シナ海、南シナ海全域及び第1列島線西部の海上と、次いで朝鮮海峡、日本海、宗谷海峡までの防御線までの海上封鎖が必要である。そして、最も短期に海上封鎖する方法は機雷封鎖である。現在では自動的センサーで目標を追尾(ホーミング)する機雷もあるので、これで潜水艦も封鎖出来るので機雷封鎖が戦略的に最適最善の戦術なのである。これらの事を考えて、日本は現在世界最強の掃海艇群を装備しているのであり、これらの艦艇は海上哨戒のみならず機雷敷設も出来、必要海域の機雷封鎖は1日で完了すると言う。しかし、この作戦を実施するには敷設した機雷が味方の艦艇を破壊しないようにしなければならない。その為に日本は黙々と根気よく日本近海の哨戒作業を続けてきたのであり、これら長期間に集めてきた情報の中に膨大な中国艦艇のデータがあるので、この時こそ、これらのデータが生きてくるのである。



① 機雷の説明

機雷とは海面、海中、海底にあつて近づいてきた船舶に反応して爆発する兵器を言いますが、自衛隊のウェブサイトでも簡潔に説明していますので紹介します。機雷は「設置方式」と「爆発方式」の違いで大まかに2つに分けられます。まず、解りやすい設置方式の違いから説明しましょう。赤いのが機雷で1. 2.:浮遊機雷、3. 4.:係維機雷です。3. 4.の機雷は特定深度まで沈下すると、そこで停止して索を海底に下ろすタイプです。5.:沈底機雷は海底まで沈降します。6. 7.:単係止機雷で自分で目標を捕らえて攻撃するタイプです。6.は目標を発見すると短魚雷を発射する機雷で、7.は艦艇を発見すると約3秒ほどで上昇して艦艇を破壊する機雷です。これらは2つとも接地後も攻撃目標設定変更が可能で有効期間1年です。注:短魚雷-全長3.5m、重量400kg、射程7km、1発数千万円するので貧乏国はこの作戦は実施出来ない。

「爆発方式」の違い。昔の機雷は触ったら爆発ものでしたが、現在は多様化して接触・磁気・音・水圧で船を探知して爆発します。接触機雷は触れれば爆発しますが、他は船舶の発する情報を分析して爆発しますが、ほとんどは複数の組合わせて敵味方を判別して爆発します。複雑化しているので日本のIT技術が十二分に生かされていますが、その分高価になっています。

音響機雷とはスクルーやエンジン音を探知して爆発しますが、音で敵味方を判断して爆発します。水圧機雷は船が海面を通る水圧の変化やスクルーを回す水圧の変化を探知して爆発する。

ですから水圧変化の少ない小型船舶は素通り出来て、大型船舶もゆっくりと移動すれば爆発しません。磁気機雷は海中の磁気の僅かな乱れを検知して爆発します。ですから木造船やプラスチック船では爆発しません。しかし、普通の船舶は金属製なので多かれ少なかれ磁気を帯びます。そこで金属製艦艇(特に戦闘艦)では「舷外電路」や「消磁装置」などをつけて目立たなくしています。

注:船体消磁とは海上自衛隊においては横須賀消磁所(消磁装置に囲まれた特定の海域)において船体の永久磁気を定期的に消磁している。特に水上鋼鉄艦艇の艦首艦尾方向の消磁を「デパーミング」と呼び、船体外周に大きなコイルをゆっくりと通して、電流の極性を変えながら徐々に弱くしていくことで磁気を消していく作業を行なう。潜水艦では艦載消磁装置の消費電力削減のためにあらかじめ誘導磁気を打ち消すように船体永久磁気を付けている。また潜水艦の艦首艦尾方向の消磁作業「フラッシング」も実施している。

② 機雷掃海艦艇 多くの船体は機雷に見つからない木造やプラスチック製

掃海艦艇は機雷があると思しき場所で作戦を行うので、極めて危険な状況で活動します。紈を使う



うらが



すがしま

分にはヘリコプターなども使えますが、装備に限界があるので主力はあくまで掃海艦艇になります。係維掃海も感応掃海も、カッター付きのワイヤーや紈を掃海艦艇が引っ張って使います。その為に掃海艦艇が必ずさきに進むので、普通の艦艇と比べて遥かに機雷に見つかりにくい構造になっています。磁気に反応する感応機雷が登場して以来、掃海艦艇のほとんどが「木造艦」になりました。船が大きいほど機雷に接触する可能性が高まるので、掃海艦艇は小型が基本です。さらにエンジンにも静音の工夫が施され、発生する音も最小限に抑える様になっています。コストが安く寿命も長いので最近ではプラスチック船が増えてますが、音が木造船より漏れやすい為に静音処理がされています。

現在の海自は世界でもトップクラスの機雷掃海能力を有しています。その一部を紹介すると「うらが」は機雷戦専用艦としては世界最大のクラスであり、機雷を敷設する能力もあります。巨大な金属製艦艇なので、機雷掃海を自身で行うのは危険なので主にヘリコプターを運用して広い範囲で掃海活動を行います。常に他の小型掃海艦艇と共に行動し、他の掃海艦艇に補給などを行うことで、小型の掃海艇が遠洋

で活動できるように支援することが可能です。「やえやま」は木造としては最大級の軍艦で、大型の掃海装備を搭載し深深度に設置された機雷などを掃海することが出来ます。海上船舶のための機雷掃海というよりは、機雷を避けていく潜水艦のための機雷掃海が主な任務です。「すがしま」級は機雷掃海の主力を担う掃海艇で、ワイヤーや紈を使う掃海能力だけではなく探知して破壊する掃討能力も強化された汎用型木造艦です。あらゆる海域や任務に対応できる高性能艦ですので、海自が有する掃海艇の中で最も数が多いのです。このように様々な種類の艦艇を用途に応じて使い分け、あらゆる機雷戦に対応できるのは世界でも海上自衛隊ぐらいです。この様に戦闘機のみならず海底でも日本が得意とする電子戦闘化しており、見かけよりもお金がかかるようになってきているので、経済大国でないこの装備は出来ないでしょう。海自の艦艇は練度共に米海軍より優れていて、まさに世界一の掃海部隊と言って間違いのないでしょう。機雷掃海・掃討作業は、はっきり言って練度が低かったり、運が悪ければ触雷して掃海艦艇が沈む可能性も十分にあります。危険であっても平時必ず誰かがやらねばならない作業なのです。ここで海自の掃海艇保有数を調べてみました。

< 国別掃海艦艇の種類と総数 (2014年時点) >

海自 - 7種26隻、米海軍 - 1種11隻、仏海軍 - 3種18隻、英海軍 - 2種15隻、独海軍 - 3種16隻

世界最大の米海軍が11隻しかいないというのが不思議ですが、米海軍は軍事費縮小のあおりで駆逐艦や哨戒艇、艦載ヘリで機雷探索を行う方針に移っており、「機雷戦艦艇」の数はどんどん減っていく傾向にあります。米国は機雷が仕掛けられたら致命傷となるような海域が少なく、機雷対策が軽視されていると言うのも機雷戦艦艇が少ない理由の一つでしょう。

③ 係維機雷の掃海、

機雷で最も多いのは海底からワイヤーを伸ばして設置するものです。このタイプの掃海は長いワイヤーに沢山の刃を付けた物を海中を進ませて、ワイヤー切って浮上したところを破壊するのです。

問題は長いワイヤーをどうするかですが、まず、刃の付いたワイヤーを海中に下ろし、機雷に付いているワイヤーを引っ掛けるのですが、問題はワイヤーの操作です。それにはワイヤーに本棚のような水中風を取り付けて、中空部分を水を通して水の抵抗によって任意の方向に動かします。これでワイヤーを上下左右に広げて機雷を引っ掛けて切断するという方法です。

④ 感応掃海、見ない機雷を囷を使って除去する手法

感応機雷とは、磁気・音響・水圧・電位の変化を感知して爆発する機雷の事です。この機雷は船が通っていなくても海中の変化を検知したら爆発するので、囷船を使って爆発させるのです。囷船とは船に似た磁気・音・水圧・電位を発生させる装置の事で、囷船を感知した機雷が爆発すれば掃海作業は完了です。これは「機雷に見つかる」機雷掃海と言えます。囷船は爆発で吹っ飛びますが、安価に作られているので損害は軽微です。ただし、可動式機雷で囷船だと気付くような機能がついているものは別で、この機雷は音・磁気・水圧など全ての手法を総合的に使って敵を探すので、偽物には引っかかりません。さらに、この様な高性能機雷は敵を発見したら移動を始め、敵に近づいてから爆発するようになっています。ですからこれら高性能機雷を破壊するには、囷装置も大幅に高性能化させざるを得ず、高価な囷装置を使って機雷掃海を行う時代になっています。



PVDS探知機



PAP-104

⑤ 機雷探知機

機雷探知機は超音波によって水中の機雷の探知・類別を行う装置・アクティブ・ソナーである。小さな機雷の探知には高い周波数帯を使うが、この場合探知精度が高くなる代わりに有効搜索距離は短くなる。このため探知機を任意の深度に吊り下げ曳航するVDS方式が用いられている。しかし、探知した目標に自走し爆発するホーミング機雷など危害範囲が広い機雷が出現により、探知機を掃海艇の前に出す必要があり、最近では探知機に推進装置を付けたPVDS方式に移行している

⑥ 掃討具 PAP-104 機雷処分具

機雷掃討は掃海が困難な水圧機雷が出現した事により考案された。これは機雷探知機により機雷を搜索し、発見した機雷を処分用の爆雷やカッターで爆破するという処分方法である。爆雷やカッターは時限式もしくは掃海艇からのコマンド信号により作動する。現在は爆雷およびカッターの設置はPAP-104 に代表されるような遠隔操作無人探査機によって行うのが主流となっている。

4. なぜ機雷掃海を日本がやらねばならないか？

以前はこのような活動は英国が中心にやってきました。海自でもペルシャ湾派遣時にはまだ現在の陣容は整っていませんでした。そのためペルシャ湾で遭遇したステルス機雷などの新型機雷を見て装備がまだ不十分だと感じ、掃海母艦や新型掃海艇などが作られたのです。そして、現在の日本の海自は本当の意味で世界最高クラスの掃海部隊を有するようになりました。中東の海峡に機雷が仕掛けられタンカーの航行に危険が生じた場合、現在は米海軍や現地の海軍に任せるより、日本の自衛隊自らがやるほうが「確実」なのです。現在でも日本と同クラスの掃海能力を備えるのは英海軍(しかし海自より旧式艦が多い)くらいです。世界中のタンカーの輸送路を確保する上で、日本の力が確実に役に立つのです。まさに危険な作業ではありますが、最新の機器に艦艇を備える海自であれば、他国の海軍がやるよりは、確実に安全な作業が出来るでしょう。日本の経済力と、ここ数年の海自の働きが評価されて、「日本がやってくれれば助かるなあ」と言う事になってきたのです。これはまさに日本の海外貢献アピールになるでしょう。

5. 中国の上陸作戦の過去の例 文永弘安の役

近代に入ってからロシアも中国も上陸作戦の経験はないが、8百年程前に中国が唯一試みて大失敗した上陸作戦に文永弘安の役があるので調べてみた。中国のこの時の元寇の敗戦を通して日本軍将兵の勇猛果敢さや渡海侵攻の困難性の記憶が、後の王朝による日本征討論を抑える抑止力ともなっているのです。元の後に起こった明による日本征討論が初代皇帝・朱元璋(洪武帝)、第3代永楽帝、第12代嘉靖帝の時の計3回に渡って議論されたが、結局実施されなかった。更にその後の日

本武装商船(和冠)の活動によって中国における対日本観は、昔日本が敗れた白村江の戦い以降大きく変化し、凶暴で勇猛な日本人像および日本脅威論が形成され、その影響は現代の海自に対しても及んでいると言われる。

さて、文永、弘安の役について、戦後の教科書にも日本が神風によって辛うじて勝ったする間違っただ説が書かれているので、元や高麗の資料ではどう書かれているのか調べてみた。当然ながら元、高麗の歴史書には、いずれも自分たちの軍が戦いに負けて撤退としたと書かれているのである。『元史・日本伝』によると「冬十月、元軍は日本に入り、これを破った。しかし元軍は整わず、また矢が尽きたため、ただ四境を虜掠して帰還した」としている。また、『小敵の堅は、大敵の擒なり』とあって、「少数の兵が力量を顧みずに頑強に戦っても、多数の兵力の前には結局捕虜にしかならないものである。疲弊した兵士を用い、日増しに増える敵軍と相対させるのは、完璧な策とは言えない。撤退すべきである」と書かれている。このような議論の末、元の范文虎の主張通り、元軍は撤退することになったという。この時元の副将張禧は自分の乗っていた頑丈な船(高麗船、中国の船はすぐ壊れた)を、船を失っていた范文虎に与えて撤退させることにした。その他の諸将も高麗船から兵卒を無理矢理降ろして自分たちが乗りこむと、鷹島の西の浦より兵卒10余万を見捨て逃亡した。平戸島に在陣する張禧は軍船から軍馬70頭を降ろして、これを平戸島に棄て島の軍勢4,000人を軍船に収容して帰還した。帰朝後、范文虎等は敗戦により罰せられたが、張禧は部下の将兵を見捨てなかったことから罰せられることはなかった。更に『元史』には日本侵攻の困難性について「たとえ風に遇わず、彼の国の岸に至っても、倭国は地広く、徒衆が多い。彼の兵は四集し、我が軍に後援はない。万が一戦闘が不利となり、救兵を發しようと思っても、ただちに海を飛んで渡ることはできない」とあり、軍議における戦況認識にあるように、日本側が大軍を擁しており、集団で四方より元軍に攻撃を仕掛けてくること、元軍の戦況が不利になった場合、渡海が困難な為援軍が直ちに到着できないことを日本侵攻の困難理由に挙げている。

『高麗史』金方慶伝によると、元軍は激戦により損害が激しく軍が疲弊し、左副元帥・劉復亨が流れ矢を受け負傷して船へと退避するなど苦戦を強いられた。やがて、日が暮れたのを機に、元軍は戦闘を解して帰陣した。このような条件の下、元軍は夜間の撤退を強行し海上で暴風雨に遭遇したため、多くの軍船同士や崖に接触して沈没し、左軍使・金侁が溺死するなど多くの被害を出しながらも朝鮮半島の合浦まで帰還した。高麗国王・忠烈王に仕えた密直・郭預は、鷹島掃蕩戦後の情景を「悲しいかな、10万の江南人、孤島(鷹島)に抱いて赤身で立ちつくす。今や(鷹島掃蕩戦で死んだ)怨恨の骸骨は山ほどに高く、夜を徹して天に向かって死んだ魂が泣く」と漢詩に詠んでいる。一方で郭預は、兵卒を見捨てた将校については「当時の将軍がもし生きて帰るなら、これを思えば、憂鬱が増すことを無くすことはできないだろう」とし、いにしへの楚の項羽が漢の劉邦に敗戦した際、帰還することを恥じて烏江で自害したことを例に「悲壮かな、万古の英雄(項羽)は烏江にて、また東方に帰還することを恥じて功業を捨つ」と詠み、項羽と比較して逃げ帰った将校らを非難している。

2度目の弘安の役(1281年)の元・高麗軍を主力とした東路軍約 40,000 ~ 56,989 人・軍船 900 艘と旧南宋軍を主力とした江南軍約 100,000 人および江南軍軍船 3,500 艘、両軍の合計、約 140,000 ~ 156,989 人および江南軍軍船 4,400 艘の軍が日本に向けて出航した。この日本へ派遣された艦隊は世界史上例をみない最大規模の艦隊であった。しかし、元軍のうち帰還できた兵士は、『元史』の中でも、全軍の1~4割と格差が見受けられる。元軍 140,000 ~ 156,989 人のうちの1~4割とした場合、帰還者の数はおよそ 14,000 ~ 62,796 人。また、『高麗史』によると、高麗兵および東路軍水夫の帰還者は 26,989 人のうち、19,397 人とされている。この戦いによって元軍の海軍戦力の2/3以上が失われ、残った軍船も相当数が破損した。この戦いの後、クビライも日本の反撃を警戒し、高麗の金州等に鎮辺万戸府を設置し日本軍の襲来に備えたとされる。

元軍は戦況を優位に進めた後、陸を捨てて船に引き揚げて一夜を明かそうとしたその夜に暴風雨を受けて日本側が勝利したという説が教科書等に記載されているが、元側と日本側の史料ともに博多湾で元軍が暴風雨を受け敗北したという記載はなく事実ではない。通常、上陸作戦を決行した場合、まず橋頭堡を確保しなければならず、戦況を優位に進めながら陸地を放棄して船上に待機して、再

び上陸作戦を執行するなど戦術的に有り得ない。また、元側の史料『高麗史』の記載によると、元軍は日本軍との戦闘で苦戦を強いられたため軍議により撤退を決定し、日本からの撤退途上で暴風雨に遭遇したとなっており、暴風雨は勝敗要因とは無関係であった。この暴風雨については、まずこの時期に台風の渡来記録がないため、台風以外の気象現象という考えられる。以上のように暴風は元軍の敗退要因とは関係なく、撤退中に暴風雨に遭ったのである。

＊ 神風について

この戦いの後、敵国調伏や加持祈祷によって元軍を撃退できたとする各神社が「神々による軍忠状」のお陰であるとして、後々幕府に対して各社による恩賞の要求が激しかった。例えば肥前国武雄社では論功行賞から漏れたため、「文永の役の際の10月20日の夜、武雄社の神殿から鏑矢が元軍船目掛けて飛び、結果、元軍は逃げていった」としており、また、弘安の役に際しても、「上宮から紫の幡(のぼり)が元軍船の方に飛び去って、大風を起こした」としている。一方、恩賞を貰った神社は後々インチキだと言われぬ様に、大げさな神話を作って書き残した。元々元寇当時の資料が少ないので、神社のこれらの作り話が当時の事実と勘違いされて、神風神話として今日の教科書にまで載っているのは、全くおかしい話である。

★ 雑がき

⑫……平尾

① スーパーマリン・スピットファイア競売へ AFP＝時事(2015年7月4日)



現地で組み立てられたスピットファイア

英ロンドンで9日、スーパーマリン・スピットファイアがオークションに出品される。同機は現在も飛行可能なオリジナル2機のうちの1機である。収益は英国空軍慈善基金と野生生物保護団体パンセラに寄付されるという。(c)AFPBB News(AFPBB News) 2億9000万円以上か

② クーラの結婚行進曲(1908年作曲)

久しぶりにFM放送でいい曲を聞いた。全く知らなかったがクーラの結婚行進曲である。放送ではピアノソナタであったが、オーケストラ盤もあるらしい。演奏は館野泉のピアノで、ワーグナーやメンデルゾーンの曲と違って、静謐で且つ情感が豊かな印象の曲であった。これは気に入った。

トイヴォ・クーラ(1883-1918年)はフィンランドのシベリウスに次ぐ世代の作曲家で、若くして亡くなっている。それは彼がフィンランドの内戦の勝利を祝う席で酔った狙撃兵の発砲によって命を落としたかららしい。シベリウスのように裕福な家庭の出ではなく、貧しい身分から身を立てたクーラの音楽は、シベリウスの音楽よりも人の心の素朴さや温かさ、情念の深さを直接的に語ることでできた作曲家のようである。この結婚行進曲を聴いていると、華やかな結婚式のイメージではなく、静粛な空気の中での式の始まる様子や、これからお嫁に行くのだという花嫁の心細さ、緊張感を音にしているようである。

終わりの方になって、結婚は希望に満ちているけれど、これからの新たな生活や気持ちが引き締まる緊張感を織り込んでいるように思う。館野泉・CD「北の調べ～フィンランド・ピアノ名曲集」より

③ 私は戦争をしたいと思った事は1度も無い。なぜならば戦中生まれで戦前戦後の悲惨な思いと生活を十分知っているからである。しかし、平和を守るには自分たちが戦い方を知らなければ、家族を助けられないではないか。ところで平和主義とは何なのか。マザーテレサは愛の反対側は無関心だと言っているのが騒ぐのは結構である。しかし、たいして考えもしないで、平和のために戦うのまで悪だと言うのは止めて欲しい。これも無関心の1つである。